隈府小だより

学校教育目標「自ら考え なかまと高め合う 隈府小」

隈府小学校
学校だより No26
文責 芹川博文
11 月 14 日（金）

走る　自分のペースで 自分に負けず
～ 持久走大会に向け ランランタイム開始 ～

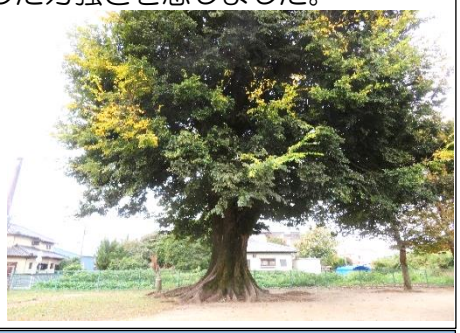
ランランタイムが始まりました。月、木、金曜日の朝の始業前、７時５５分から８時５分までトラックを走ります。自分のペースで、持久走大会の練習も兼ねて体力をつけます。

子どもの頃、私は走るのが苦手でした。呼吸の仕方を考え、心の中で歌を歌ってリズムをとったり、「あの電柱まで」と目標を決めたりと、自分なりに工夫した記憶があります。速い人はきつくないのかと思い、尋ねてみると、「きつかばい」とのこと。毎日３㎞以上の学校への道を通っていたその友達は、笑いながら答えました。

当時の持久走大会は、順位のみでした。しかし、今はタイムも出ます。前回の自分と、今日の自分との変化で、伸びが分かります。スタートから飛ばすのか、ラストに力を貯めておくのか、など、自分なりに考え、その変化をタイムと共に振り返ることができます。きつさや苦しさ、走る前の緊張、走り終えた後の友への声掛けなど、走ることを通して、体だけでなく心も強く、たくましく、優しくなってほしいと願います。

学校グラウンドのバックネットの裏に、大きなエノキがあります。先日、草を捨てに行って改めて根の部分を眺め、恐竜の足を思わせる迫力、ゴツゴツとした力強さを感じました。

大樹を支えるその根は、人生の土台にもたとえられます。小学生のこの時期にこそ伸ばしたい力、そのために経験させたいことを考えたいものです。走ることを通して、更に根を伸ばしていく子どもたちを応援しながら。



対話を通して 理解していく
～　ふるさと懇談会と新聞記事から考えたこと　～

先日、地域（袈裟尾）住民として「ふるさと懇談会」に参加しました。人権啓発 DVD を視聴した後、小グループで感想や思いを話しました。私が参加したグループでは、「外国の方が増えてきたが、話してみると分かり合える。ゴミの出し方や夜の声の大きさなど、生活のきまりや文化の違いも、きちんと伝えることで守ってくれる。若いのに、異国の地でよく頑張っていると思う」との声が複数の方から出されました。私も、以前、中東のカタールで「外国人」として生活した時のことを話しました。「こわい」とイメージを持っていたイスラム教の方々の温かさにも触れ、勝手な先入観を持っていた自分を反省しました。

先日、ハンセン病家族訴訟原告団長の林力さんが亡くなられました。以下、１１月１３日付の熊日新聞の新生面一部を要約します。

＜患者の父を恐れ、隠し続けた。人には『死んだ』と言い、また『死ね』とも思った＞。父親の広蔵さんが発病したのは、林さんの小学生時代。風貌のゆがみなどから近隣で噂となり、林さんは級友から「くされの子」とそしられた。しかし、同和教育に携わり、同様の理不尽な仕打ちから逃げずに向き合う被差別地区の人々から学ぶうち、「恥でないことを恥とするとき、本当の恥となる」との境地に至って、父親の存在を秘密から解いた。

誰かの生き様に触れた時、力と勇気を得ます。誰かと対話して分かり合えた時、安らぎと嬉しさがこみ上げます。「人権の世紀」と言われた２１世紀が、「分断」と「非難・攻撃」の世紀とならぬよう、日常の小さな対話を通して相手を知ること、理解していくことを大切にして、私自身、先入観や思い込みを見直していかねばと思います。

今回の「ふるさと懇談会」で、学校職員としてでない対話の大切さも改めて感じました。